

第4分科会 人権確立をめざすまちづくり

第3分散会

I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案。協力者から、大会基調をもとに「人権確立をめざすまちづくり」について提起された、分散会の進め方を確認したあとで、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

－報告1－⑫

住吉地区の「真実」をつたえる

～人権が尊重される社会をめざして～

(大阪市人教)

－主な質疑と意見－

愛媛 「6つの原則」「公設置公費民運営」について詳しく教えてほしい。

報告者 同和対策事業を活用した住吉地区のまちづくりには、「三つの特徴」と「六つの原則」がある。一つめは住民が主体的に参加した、二つめは専門家が参画した、三つめが六つの原則を策定した特徴。六つの原則は、「一、我々が永住するまちづくり。二、全ての地域住民を対象とするまちづくり。三、人間のつながりを大切にするまちづくり。(差別と戦う団結のまち)四、住民の健康を守るまちづくり。五、子ども、高齢者、障がい者がのびのびと生活できるまちづくり。六、近隣住民に開かれたまちづくり。」住吉の隣保館の特徴は、公がお金を出して建てる。地域の課題やどういった事業がその課題解決に有効なのかは、地元のことをよく知っている地域の住民を積極的に採用する。初代の隣保館館長がそれにこだわり、公設地公費民運営方式をその頃から続け、今も隣保館を地域で運営している。

愛媛 地元の小中学校での部落問題学習の関わりについて今取り組んでいること、あるいはこれから考えていることがあれば教えてほしい。

報告者 私たちの時代は解放子ども会があって、自分たちの部落差別や社会的立場の自覚を学んでいた。この20年ぐらいの間に、大阪市は、同和対策事業特別措置法で建設した施設を次々と廃止し、地域の子どもたちに部落問題を教える拠点が

なくなった。私が住吉人権文化センターで働くようになった当時(2005年～)、地元の学校では、歴史の時間に解放令、全国水平社を教えていた。それはそれで重要だが、この地区の子どもたちにとって、身近な問題に結びついていないと思い、一緒に内容を考えることを提案。小学3年生の校区探検で隣保館に来てもらい、いじめや差別をなくそうという話をする。5年生では事前学習もして識字学級の見学。6年生では、顔見知りになっている隣保館職員が学校に行き、自分の生い立ちを語る。中学校は二つの小学校から生徒が来ており、何度か部落問題学習をしている小学校と知識も出会いもほとんどない小学校が1つになる。だから、中学1年生で、もう一回私が行って、自分のこと、部落問題の基礎知識的な話をする。また、隣保館に来てもらって、フィールドワークや少し踏み込んだ話をする。2年生の歴史の授業でもう一度水平社宣言、3年生で統一応募用紙について学んでいると聞いている。部落問題が現在もある問題で自分たちの身近な問題であることを知り、それに対して自分たちはどう生きていくのか投げかけるところをゴールにしている。

大分 調理員の確保が厳しい中、隣保館の推進事業で免許を取得し、保育所での給食調理員として活躍する流れをどう企画したのか。また、今の高校生の学ぶ場がどうなっているのか。

報告者 保育所の給食調理員は、同和対策事業特別措置法の中で、大阪市は住民が調理師免許を住取得し、安定した職業に就けるようにしてきたもの。高校生を対象にした事業というのはできていない。小学生の居場所事業、子ども食堂などに対してボランティアで来てもらい、そこで一緒に関わりながら、部落差別のことも知って学んでもらう。高校生になっていきなり来てボランティアする人は少なく、小学校の頃から活動に参加し、今度は手伝う側に回りたいと言う人が多い。大学生もボランティアやアルバイト職員という形で関わってくれている。

愛媛 住吉・住之江同和人権教育推進協議会とあるが、同和人権教育に意味があるのか。それと、この推進協議会の構成員等、教えてほしい。

報告者 もともと、1968年9月に住吉同和教育推進協議会という名前で設立された。その時は地元の小中学校と隣保館と部落解放同盟住吉支部が一緒になって部落問題解決を目指した。同和問題から始まったというところで、同和という文字が先にきていると思う。住之江という隣の区があるので、住吉・住之江同和人権教育推進協議会と名称を変えた。今は、18の小中学校、2つの保育所、公益財団法人と部落解放同盟住吉支部、教職員組合。そういうネットワークで、同和人権教育を推進していこうと研修や啓発を柱にした活動を続けている

のが、この住吉・住之江同人権教育推進協議会。
熊本 現在の状況も含め、これまでの識字活動、運動、どんな歴史の中で今があるのか知りたい。

報告者 もともと住吉の識字学級は1966年に始まった。福岡県で行われた全国婦人集会に参加した時に、福岡県の識字学級の実践報告を聞いて、住吉でも始めようとなった。輪になって同じ本を読み合わせしようとしたが、ほとんど誰も本を読めず、鉛筆の握り方やひらがなに学習形式を変えた。ただ、輪読会という名前はみんな気に入っていたので、ずっとその名前を使っている。識字学級が3教室あるが、青少年会館、隣保館、総合福祉センターを使っている。住吉は民設地民運営の隣保館があるが、他の大阪市内の識字学級だったら、学校の空き教室を使っているというのが現状。

三重 地元の子ども食堂に携わった隣接地域の青年たちがどういった思いでここに関わったり携わったりしたのか教えてほしい。

大阪 子ども食堂を立ち上げた2017年からずっと来てくれている子たちが高校3年生。今関わってくれている高校生、大学生は、地域外の子たちで、私一人が当事者。夏休みに小学生にいろんな人権を知ってもらう取り組みがあり、そこで部落問題だけじゃなく、障がい者問題、LGBTQ問題、沖縄反戦問題等、どう子どもたちに伝えていくか、地域住民と考えている。今回番組に出てくれた二人や青年の子たちにも企画を任せている。参加者からは、ここに来て楽しい、いろんなことを相談できる、大きい家族みたいだと聞く。世代がバラバラの中、この人だったら聞いてくれるかな、この人と喋りたいな、と何でも相談し合える関係性づくりをしている。

奈良 「月刊建築ジャーナル」に住吉のまちづくりが載るのは、すごい。掲載・特集の経緯を知りたい。

報告者 不可視化のグループリーダーである小田原さんが訪ねてきてくれ、金城実の作品と一緒に紹介したり、金城さんに実際に会いに行ったりした。建築ジャーナルの特集記事を組むうちの一人が小田原さんで、編集長も含めて住吉のまちづくりの話をした時に、50年ぐらい前のまちづくりが、一周回って最先端だと言われた。例えば、フランスのパリやスペインのバルセロナは、その住民がまちづくりにどんどん積極的に関わって行って、どんなまちにしていくのがいいのかというのをやってる。「まさに」っていうところから興味持ってくれて、建築ジャーナルにつながった。

福岡 部落問題学習の内容、学校と地域、あるいはPTAと地域とのつながり方で組織的なものがあれば教えてほしい。

報告者 住吉住之江同推協活動は一つだと思う。隣保館での総合生活相談事業でケース会議がある。ケース会議にも学校が参加して相談体制をなるべくきめの細かいものにしていく。また、出てきた課題を子どもの居場所事業とかに返していく流れの中での学校との連携ってというのはある。

協力者 部落差別は根強く存在しており、インターネット上では、陰湿化悪質化した差別書き込みや差別助長の動画が多くある。新たな部落地名総鑑の発覚、行政への地名の問い合わせも繰り返されている。結婚、就職、土地の取得などに関わり、潜在した差別意識の課題は依然として存在している。差別は人らしく生きる権利、公正で豊かな暮らし、様ざまな可能性を奪う。人間の尊厳、人を大切にする当たり前の営みとして、部落差別あらゆる差別の解消を目指し、今後も取り組み活動を強固に進めることをあらためて確認する。

－報告2－⑬

コリアンオモニたちから学んだ、目からうろこの「生きのびる力」(京都市人教)

－主な質疑と意見－

大阪 心に秘めているものを周りに言っても大丈夫なんだと関係をつくるために、報告者が大事にしていることを教えてほしい。

報告者 まずは互いが信頼関係をつくっていくこと。最初に入居された時に挨拶をし、その後出会うたびに声をかけていくと、少しずつ心を開いてくれる。私は応援してるってことを言い続けることによって、その人との関係ができ、ひょこっと相談をしてくれる。本人でないとわからないことはあるけど、一緒に考えようということができたら、少しずつ心を開いて、私のことを誰かに言っても大丈夫なんだと思えるようになると思う。

大阪 差別解消のためのカミングアウトを積極的にしていきたいという話があった。テレビに映るのはやめとこうという声もあった中、隠さず公開しようという声かけはどのようにしたのか。

報告者 集会場で週に一回食事会や体操をして、横のつながりづくりをしている様子を写したいと番組が来たが、ほとんどの人がNGだった。今更団地を外に出してオープンにするのは嫌だと。私は当事者じゃないから、どうしようかと悩んだが、応援するメンバーがいっぱいいた。この地域の問題と一緒に関わろうとする人が山ほどいることに気がついて、みんなでなんとかすればなんとかかなと思ったのが、この発信のきっかけ。

熊本 報告を「生きる力」ではなく、「生きのびる力」

と表現された思いや考えを聞きたい。

報告者 一世のオモ二たちが今日を生きて、明日につないだということの繰り返しをやってきたことを見てきた。経済的な大変さ、いろんなしんどいこと、怒りや悔しさがあるが、とりあえず今日 1 日を過ごせば明日があることがよく分かった。生きるってそう簡単なことじゃないけど、生きのびていれば明日につながる。

奈良 この団地の中で子どもたちがつながっていくような活動があれば教えてほしい。

報告者 なかなかできていないのが現状だが、声をかける。ひたすらその子の話、その子のお母さんの話を聞いて、気持ちを受け止める。私らはあなたの味方やで。だから何かあった時に「言ってな」っということを行っている。

奈良 立ち退きを迫られていたところから、行政を動かして住宅を建てたり、事務所を設けたりというところまで持っていかれた。行政に対する要望があったら教えてほしい。

報告者 住民運動をしていた時には、住民当事者、住民支援をする若手メンバー、行政職、大学の専門職が入ってくれた。福祉関係の大学のチームや建築関係の専門職に入ってもらい、多方面から関わることが一つは大事だった。行政には、なぜこの問題が起こっているのか、問題の本質はどこにあるのかという現状を知ってもらいたいので、言葉のやりとりだけではなく、現地に来て見てもらうことが一番大事だと思っている。

熊本 うちの学校にも厳しい中で生きている子どもたちがいるが、本人や親の責任じゃない。教育現場への要求や先生たちとどうつながりながら、どんな取り組みがなされてきたのか。

報告者 15~20 年ぐらい前までは、学校との連携があり、先生が家庭訪問したり、保護者も学校に相談に行ったりしていた。今、東九条では、児童館が間に入って、子どもたちの様子を先生に伝えている。若い先生たちは今の現状、見た目にわからなくなっている歴史を知らないなので、まずは知ってほしい。大変だと思うが、管理職の方にはもうちょっと興味を持ってつながってもらいたい。何でこんな辛労をしなければいけなかったんだとか、あの政策にどういう問題があったってことは解決されないまま、そこが外国人労働者の問題としてスライドされ、こういう人たちがいるんだよ、みたいになっている。本質の部分を先生が学ぶ機会を保障してほしい。

- 1 日目討議 -

高知 「故郷の家」という老人ホームについて質問。この施設が田内千鶴子さんの息子さんが設立したもので、「キムチと梅干しが食べられる老人ホーム」として知られている。また、コリアンの高齢者の認知症の特徴や、地域コミュニティにおけるこのような施設の重要性を考えたい。

長野 二人の報告に感心するばかり。感想になるが、結局は人と人の問題だと感じた。僕は諦めず、それぞれの立場で地域づくりのために何ができるか。先生は学校だけに閉じこもらないで、地域の人ももっと知り合いになろう。NPO の人もそれだけに終わらず、学校に対してどんどんものを言って、顔を覚えてもらう。その中で、地域のおばちゃん、おじちゃんが、まさに生きる教材として授業に生かされる財産になる。

福岡 人権のまちづくりは行政の力が大きいと思うが、学校や地域と一緒にやっていかなきゃいけない。有効な方法があれば知りたい。

報告者(大阪) 行政と地域、学校と地域が連携した取り組みでの成功事例は難しいというのが本音。同和教育や人権教育に理解のある校長が来て、どんどん進む時もあるし、その逆もある。教育委員会がしっかりと方針を打ち出して、学校長を派遣する。そこに行く時に研修とか指導してもらって来てもらうっていうのがやっぱり大事だと思う。地域からは毎年教育委員会に対して交渉もしている。それが噛み合ったら、人権教育や同和教育が進んでいくと実感している。

愛媛 第 76 回大会ってすごい歴史がある。毎回思うのが、何で全国放送せんねやろかって。僕も被差別部落の人間。『被』が嫌いで、必要ない人間なんかとか、いろんな意味で取ってしまう。同和地区、その地区言われるのも嫌いやけど、するならとことんやってくれと思う。その方が、私らも子どもに真剣に言える。

報告者(大阪) 水平社宣言を思い出した時に、「全国に散在する吾が特殊部落民よ団結せよ」「吾々がエタである事を誇り得る時が来た」っていう、あえて賤称語を使って、差別をなくしていった意気込みを僕は感じる。エタとカタカナで書いてるのは、穢れが多いという字に対する抵抗。その言葉をなくして差別がなくなんねやったらなくしたらいいけど、そうじゃない。言葉の問題ではなく、自分があその出身だと言っても差別を受けない安心できる地域、まちをつくりたい。

報告者(京都) 日本人とコリアンの間に生まれた子どもをハーフではなく、東九条ではどっち

ものルーツが大事やってということでダブルと言う。人間が生きてきた積み重ねが歴史と知ると、自分が当たり前と思っていることは、この人にとっては当たり前じゃないという発見につながって、自分のプラスになって豊かになる。周りの人が互いのことを知って、互いがつながっていくことがまさに教育なんじゃないか。カミングアウトについても、いろいろ意見を聞きたい。

愛媛 うちの子も、カミングアウトした。それがよかったのか、今でも悩むところ。みんな分かってくれてるってことがすごく大事やと思う。なんか言ってみんながそうなんやなって思ってくれたら、それが当たり前になって、みんな分かってくれてんやって安心感につながる気がする。

報告者(大阪) 僕はゼッケン登校で、狭山の5. 23とか10. 31の時に集団登校した時代。それがほぼカミングアウト。もっとはっきりカミングアウトした私たちのもうちょっと上の先輩らは卒業式の時にやったり。子ども会も減っている中で、今はどんな場面でどういう流れの中でカミングアウトをするのか。やった後にお子さんどうやったんやろうというのが気になる。

愛媛 娘さんは、5年生ぐらいで子ども会に参加。卒業生が高校のクラスの中でカミングアウトした話を聞いたり、小学校からの学びの積み重ねがあったりして、自分で言いたいという意識になっていたのではないか。人権フォーラムの中で自分の家族を劇化したもので、立場を演じる中でカミングアウトしたかたちだった。本人は納得し、周りの理解もあったし、支える子もいたけど、それ以外の人たちがどうだったのかは分からない。

高知 高齢者施設で働いている。20年ぐらい前は子ども会の児童館で働いていて、その前はデイサービスにいた。その時はすごく差別発言があった。小学校、中学校、地区全体と、どんどん人権学習が進められ、子どもが学校で習ったことを家でまた学習し、じいちゃん・ばあちゃんに話し、その時の親やじいちゃん・ばあちゃんが今施設にいるが、全く差別発言がない。やってきたことが根付いているのは、町あげての同和教育の成果。

福岡 自分がマイノリティだと宣言するのは、二種類あると整理している。この空間なら安心安全が保障されるという場面と、差別がすぐそこにある中で、自分のことを伝えないと変わらない場面。人権課題についての学習は、差別する人と差別される人がいて、当事者抜きの人権学習はありえないと思う。教材があるからじゃなく、差別をなくすために部落問題学習をする。LGBTQ、部落、在日…の当事者ではないけど、差別をなくすために動こうとしている当事者だっていう当事者性を自分の

中では持っている。私が狭山の中央集會に初めて参加した1990年。東京で1万人規模の集會でデモがあった。新聞には、その集會の記事が3行か4行。これだけしか記事にならないという捉え方をしたけど、その広い紙面で、たった数行でも記事にした記者は中で闘われたんやないかなって今は思う。

報告者(京都) 当事者なしの人権学習はないと言われたが、私はコリアンに関しては当事者ではないけど、社会を担う当事者ではある。一人ひとりの当事者性の中で語ることは可能なんじゃないか。

福岡 福岡市だけかもしれないが、学校の先生が形式的な授業になっている。ゲストティーチャー自体も教材として見てしまう現状がある。自分はどの立場で考えなきゃいけないのかなということ、当事者という言葉を使って表現した。

福岡 私のムラも、解放子ども会で差別の勉強をし、発表する場がある。いわゆる立場宣言になるので、親もドキドキする。私たちの頃は部落民宣言で、立場宣言と違う。部落民宣言は、私は部落差別と闘っているという宣言で、立場宣言は、私は解放子ども会で勉強をして、差別をなくそうという立場で頑張っているという宣言。先生も差別をなくす立場で宣言できる。ムラの子ばかり立場宣言するのではなく、ムラの子以外も差別をなくす立場で宣言できる。差別をなくす立場なのかどうかというところで立場宣言は誰でもできる。

福岡 解放子ども会の指導員として実践をしている。ほぼ毎日活動をしながらかついでに解放学習をして、10. 31の学習や黄色いゼッケンをつけて自分の決意表明をし、シュプレヒコールをし、狭山の歌を歌い、子どもたちが頑張っている。子どもたちは、自分は差別をなくすために活動している一人だと認識している。筑紫地区は6年生を集めてリーダー研修をしている。福岡でいうと田中松月さんや柴田啓蔵さん、松本治一郎さん、上杉佐一郎さんと続き、自分のじいちゃん、ばあちゃん、そして父ちゃん、母ちゃん。解放運動は自分たちの知っている人たちが頑張ってつなげてきたものだと思っただ後に、西光寺の住職の話を知ったり、水平社が創立された奈良県でフィールドワークをしたりする。「私たちも解放運動を受け継いでいきたい」「自分も何か伝えられる人になりたい」「自分のことを好きになって、それが差別をなくすことにつながる」と感想に書いていた。この素晴らしい解放運動を受け継ぐ一人なんだってということが、立場の自覚になる。

福岡 就学前教育から始まり、同和教育、人権教育が子どもたちの胸に響くのは、先生方の言葉一つ一つ。それプラス親が解放運動を頑張っている姿、あらゆる差別に対して憤りを持つ姿。就学前教育、

人権教育、同和教育、これが伴っていないと、子どもたちは胸を張って成長ができないような気がする。東九条のオモニ、オボジが顔出すの嫌やって分かる。怖い。いっぱい傷ついた。じいちゃん・ばあちゃんたちは何が差別かわからなくて生きてきてる。何らかの方法を考えて配慮すべきだったんじゃないか。広げるのはいいことだけど、基本的な教育をしっかりしてやっとかんと、そこに子どもがいる。命がかかっている。

大阪 カミングアウトとその地域での子どもたちについて。私も 2018 年に初めてインターネットテレビに出て、すごい反響があった。視聴者が少ないと言われていたにも関わらず、ネット記事のトップニュースになり、多くの誹謗中傷コメントを受けた。地域の子もたちが「部落って何？」と調べた時にデマではなく正確な情報に触れられるようにするため、あえて出演し、私はこういう立場で、こういうことをしていくのは、この地域にまだある偏見や差別をなくしたいと思っていると伝えた。部落問題は、自分がカミングアウトして終わる話ではなく、そこに住んでいる地域の人や活動に来ている地域外の人も巻き込むことになる。その後、学校での講演依頼が増えたが、教職員の研修で多くの先生が寝ているという二次被害に遭い、講演活動を一時中止した。人権教育に真剣に取り組んでほしい。

愛媛 20 年近く前に三重県で全国大会があった時に、子ども会の子もとの関わりを報告した。その中学生は立場の自覚をしていなかった。立場の自覚をさせていない理由について、「先生を信頼していないわけではなく、立場の自覚をさせる時には一番近くにいる親である自分がきちんと伝えるべき」という言葉をもらった。何も発信せずなかったことになってしまうことは避けたい。被差別の痛みを感じる子どもを育てるためには、教師自身がその痛みを感じる事が重要。被差別の痛みだけではなく、差別する側にも痛みがある。自分自身も人を傷つけた経験や目の前にある差別を見逃してしまったこともある。そういったことも含め、自分を変えていくために学んでいるということを伝えていきたい。

愛媛 今の子ども会の子もたちは、地区の子もたちだけではないが、みんな差別をなくす同じ立場だと理解している。上の子は、子ども会で学ぶ学習が楽しくて、友達も一緒に活動できたらいいなという思いから、数名の友達に数年前にカミングアウトをした。阪神タイガースのファン。ピーマンが嫌い。自分の中では、これが好き、これが嫌いという感覚だったそう。下の子は、仲のいい友達が子ども会の活動に興味を持ってくれたので、その子にだけ自分の立場を伝えた。すごくドキドキしたと言っていた。愛媛県の人権教育協議会や人権対策協議会などが主催する講座等で自分の思いを

伝える場を何回も与えてもらっている。いろんな人から認めてもらったが、理解者ばかりではない。この社会の中でどのように自分のことを伝えていくかは子どもたち次第だが、見守りたい。

福岡 長女が 5 年生の時に、私自身が中学 2 年生で部落民宣言をした時の作文を見せて話をしたら、聞きたくなかったと言われた。4 人子どもがいるが、子どもによってそのタイミングは異なる。次女には 6 年生の時に、同じように、私が書いた作文を見せると、何も言わず、ただ涙を流した。結局、その涙が何だったのかわからないまま。親としては、言わないといけない。立場の自覚を子どもたちにさせないといけないと悩む。でも、子ども会や学校の中での学習を通して自然と立場を自覚していくことも教えてもらい、肩の荷が少しおりました。

福岡 古賀市の小学校教員。この市は人権課題にすごく取り組んでいて同和問題が中心にあると捉えている。古賀市は、年間の研修や地教の方と話す機会があり、素地がある中で中学にあがる。ただ、本当に自分がそれで指導できているのか迷いもある。ある子が自分がその当事者だと言ったときに、友達が、俺なんとなく気づいとったよ。お前はお前やって答えた一例がある。そういった感覚を持った子どもたちを育てていくのが僕らの責任。これから先も現実に学び、教員として人間関係を磨いていく決意を新たに持った。

－報告3－⑩

識字の灯をつなぐ

～永岡支部識字60周年の節目を確かな一歩
にするために～（福岡県同教）

－主な質疑と意見－

大阪 2 点質問があります。1 点目は、三世代対談で 20 代から 70 代の幅広い人たちが思いを語りあう中、若い世代がどう受け止められたか、受け止めてどういう発信をされたか、印象に残っていることがあれば教えほしい。2 点目は、永岡の水平社宣言「湯の上宣言」をどういうふうにつくっていかれたのか教えほしい。

報告者 三世代対談については、若い世代の支部の方も参加されて、差別や今までの生きざまなど、いろんな思いを語りあう中、若い世代の方は先達の想いを受け継ぎ、次の子どもたちに伝えていかないといけないと強く感じている。私自身も、しっかり頑張らないといけないと思う。

福岡(報告関係者) 湯の上宣言は、永岡の識字学級の 40 周年記念事業の際につくった。その際に、何を自分たちは皆で共有するのか、差別との闘い、励ましあい、識字の願い、未来への展望など、永岡

の人たちの生きざまそのものを文字にした。

大分 報告の取り組みから学ぶことが多く、学びながらの喜びというか、すごく共感した。識字学級の活動を子どもたちにつなぐ、子どもたちに学校を通じて広めてというところがあった。そのところをもう少し教えてほしい。

報告者 今 60 周年記念誌作成中で、紙芝居も支部でつくっている。いずれはその紙芝居が完成後、学校の教材として使いたいと考えている。その紙芝居を通して子どもたちに永岡の人びとの強さやたくましさ、温もりを伝えていきたい。そして、私自身、学校の人権学習や日常生活において永岡で学んだことを自分の思いも含めて子どもたちに伝えていきたい。同時に、教員にも伝えていきたい。

熊本 小学校に勤めています。自身、識字と出会って学ぶことがいっぱいある。識字で学んだことを学校の教育課題にどう生かしていくのが大切です。学校の教職員、子ども、そして、しんどい中で懸命に生きている子ども。そうした子どもたちの暮らしや生き方にかかわって、学校現場で教職員が何をするかどうしていくのが大切です。報告者が識字学級で学んだことを学校の子どものように活かしているのか教えてほしい。

報告者 私が今の中学校に赴任して 6 年、人権教育担当として 3 年になる。自身、体育の教員で識字学級に出会うまでは、体育の教員は学校をしめなければいけないと先輩が話され、私もそう思っていた。しかし、筑山中学校に赴任し、識字学級に出会ってから、子どもたち様々に背景があるということに気づいた。そして、子どもの背景を気にしない私の言動で傷ついた人がたくさんいたに違いないと感じた。識字学級と出会ってから、子どもたちへの関わり方、保護者への関わり方、まずは、一人ひとりの背景を考えるようになり、家庭訪問の繰り返しや関係機関との話や連携を大切にしている。

愛媛 報告者の率直な胸の内、識字学級の方がたの人生の歴史を聞き、本当にためになった。識字学級での結婚差別の模擬授業について、差し支えない範囲で授業の流れを教えてください。

報告者 結婚差別の授業、自分が教員役になり、学級生さんが生徒役という形で、結婚差別を受けた方の映像の教材を活用し、1 時間弱くらいで行った。そこから、差別する側と差別される側、どちらも苦しみがある、どちらも幸せにはなっていない、というところ。差別をなくすために大切な心と行動はどういうことかということをお話し合い、考えあっている。

福岡 私も識字学級に参加している。私は、識字学

級は弱者救済運動という意味ではなく、当事者の自己解放運動の一つだと捉えている。当事者が抱えるだけの問題ではなく、社会全体の問題を学ぶ場所だと思っている。報告者・識字学級の 3 名を中心に報告を聞き、部落差別をはじめとしたあらゆる差別と闘うということの意義と大切さを子どもたちにもっと伝えてほしいと感じたし、識字学級を通してどんなふうに皆さんが癒されてきたのかということもつなげて、発信していただけたらと思う。

熊本 学校の教員です。つなぐってどうすればいいのかと考えながら聞いていました。現在、解放子ども会に関わっています。近々、差別をなくす人権集会で解放子ども会の子供たちが劇を発表します。子ども会活動を進める中、保護者から、まだまだ先生たちは甘い、今時の子どもにそこを厳しくしたらついてこないなどの意見があり、いろんな保護者さんたちと話をします。そういう中で、すごく厳しいことを言われます。先ほど報告の識字学級生の方から、かつて非常に厳しい言葉を言われたとのことでした。同じように厳しい言葉を言われ、子ども会から距離をおきたいと思うようなこともあります。でも報告の方はそれでも関わり続けようと思われ、今はこうして愛情をこめられ「さんばば」と呼ばれるまでになられた。私に何かヒントがあれば、そのあたりを聞かせてほしい。

報告者(識字学級生) 保護者の方からしたら、子どもたちに学力をつけさせてほしいという願いで、先生方にそれこそ厳しく言われたのだと思います。私は、厳しく言われたからずっと識字学級に来ています。そういう先生たちが何人もおられる。識字に長く長く関わってくださる先生たちも、親たちにそんなことで子どもが本当に生き抜いていけるのか、差別の世の中を生き抜いていけるのかというふうに厳しく言われたからこそ、子どもたちを差別に負けない子に育てようというふうに思い、ずっと識字に関わってくださる先生たちが何人もおられる。私自身、当時「あなたは逃げられるやろ。逃げようと思ったらいつでも逃げられるやろ」って言われました。実際そのとおりなんです。全然別のところに住んでいましたので永岡にいなければ私は差別されることもありません。彼女の言うことは最もなんです。全然私の今の生き方はこの人と共に生きるというふうにはなっていませんでした。厳しく言われましたけど、それはあなたが私と一緒に歩んでほしいから、差別を憎んで共に生きてほしいという思いと人への優しさがあるから、今の私がある。

－報告4－①

全国識字学級実態調査・学級訪問から

識字学級のこれからをみつめる（大阪市人教）

－主な質疑と意見－

福岡 いろんなマイノリティの立場にいる人たちも含めて地区外の人や外国にルーツを持つ人、学校になかなか行きにくいと思っている子どもたちも含めて識字学級への参加が増えているということで、それはもちろん自分を語るという意味ではなく、エンパワーされるので非常に大切なことだと思う。その取り組みがどのように反差別の集団づくりにつながっているのかというところを具体的に教えてほしい。

報告者 B 例えば大阪のあちこちの教室で識字水平社 100 年宣言をつくろうというのをやっています。その時はそれぞれの教室の学習者の人が自分の生い立ちを綴ったり生活体験を綴ったりしました。そういう作業を通して自分たちだけが悔しい思いをしたのではない、他にも同じような思いをしてきた人がたくさんいる。そして識字学級をとおして私の水平社宣言というのを発信したりしている。それからここ 1 年ぐらいで言うと、人権ディフェンダー要請プログラムということに取り組んでいる。その中でいろいろな人権課題について識字学習で学ぶというのをやっている。外国人への差別で言うと政府の在留外国人の生活実態調査の中に非差別体験というのものもある。それによれば少なくとも半数ぐらいの外国人の人は日本に来て被差別体験があるということです。それからサーベイリサーチセンターという民間企業も在留外国人の生活実態調査というのをやっており、その中に日本で出会った人権課題という項目があり、知らない人からじろじろ見られるという項目への回答が 4 割を超え一番高く、他にも調査項目がある。その調査結果を使って教室におじゃまし、尋ねてみると、外国人への様ざま偏見や被差別体験についてかえてくる。そういう体験を交流することだけでもつながりは様ざまに生まれると思うし、それを様ざまな集会で発信をすることで今こんな問題が発生しているというようなことが出てくる。さて、海外から日本に来て教室で学びたいという人が日本語能力試験に受かりたいという風になってくると、なかなか被差別体験とかも出ない。半数もしくはそれ以上の人々が日本で被差別体験をしているとしたらそれが出ないということ自体がおかしい。海外からの人が来られているけれど、被差別体験を話されなかったら、それは何か抑え込む雰囲気があるのだろうと思う。もし皆さんの知っているところでそういう教室があったら、何が問題なんだろうということを考えてみていただけるといいなと思う。逆にこういういろんな体験を出してもらって、そういう活動に

ついて紹介いただければと思う。

報告者 A 自身がいつか差別の立場になるかもしれないという、結局、差別する側になってしまっているというのが課題。そういったことで識字・日本語センターでは教材を開発してプログラムを教室に届けるということをしている。一番腹が立ったのは、外国人に部落問題なんてわからないという認識。エンパワーも勿論大事だし、癒やしてという言葉も出ましたけど、そういう場所でもあるけど、しっかり社会の問題を、差別って何なのか見抜く、見抜いて差別が見えたらどう対抗していくのかということスキルとして身につけていくのが識字の役割と思っている。

福岡 先ほどの質問の説明の中に発信ということがありました。マイノリティ側という自分たちの差別体験を語っていく中で仲間がいるということを感じているというところですが、やはり差別をする側のおかしさに気づいていくことが大事なのはそのとおりだと思う。発信の中でどのように伝えられ、どのように社会を変える取り組みをしているのかというところを、聞かせてほしい。

報告者 B 社会を変えるための取り組みというのは具体的にどんなことをイメージされていますか。

福岡 先ほど仲間がいる、私だけじゃないというようなところがあった。差別をなくすというところでは、差別する側が学ぶこととか、反差別を正しく伝えていくことが大事だと思う。そこにつながるような発信があればお聞きしたい。

報告者 B 私としては文章を綴ってそれが普及していくことそのものが社会を変えると一つだと思っている。学習者が学校へ行って子どもたちに話すとか、学校教員に話をすると、その場所に行って自分の生い立ちを話す。今、大阪市は全国の政令指定都市で一番不登校児童生徒が多いところなんです。その人が自分の生い立ちを話すというのはそれである意味十分なところがあるんじゃないかと私は思っています。教室からの発信を受けとめて教員が学校で教材化し取り組みを進めることが大切だと考える。

大阪 正直学校の教員も忙しく、今日ちょっと忙しくて行けませんと言ってしまう。でも部落の人たちはその立場から逃げるできないと思ったときに、忙しさに負けたらあかんと思い私は若い教員たちと一緒に識字学級に行くようにしている。私の通う識字学級ではここ数年ずっと部落解放文学賞に応募し、賞をもらえたら自信にもなるということで続けている。数年前に賞を受賞された方の生い立ちについて、地域に本格的な教材があるのだから、学校で活用しようということで、市の人権教

育研究団体で学校現場での教材化を進めている。先日、私の勤める学校の子どもたちと地域の識字学級を訪ねた際に学級生の方が、「ほんまは識字なんてあったらあかんね」と言われ、子どもたちには一番衝撃な言葉であった。あったらあかんというのもふまえ、でもやはり識字学級は大事な場所です。今後どんなふうに識字という場所が大事なものを残しつつ、あるべきなのかということについて、報告者の願いを教えてください。もう一つ、ある読み書き交流会で、ある方が外人・外人と言われて、後から指導が入り、それを識字学級に帰って話をしたら、差別感なく生活言語として使っている、という感じがあり、このような時のポイントについて教えてください。

報告者 B 日本人が外人という言葉を使い分けることがあります。外人という言葉を使うからダメとかいうのではなく、その言葉がどういうふうに使われているのか、どういうふうに差別的な意味で日本人が使ってきたのかということを知ることが大切だと思う。そして識字学級について、学びに来なければならない状況というのは私も人権確立を成し遂げ、結果的になくしていかないといけないと思う。文章を綴って発信していくとか、そこからいろんな人をつながって運動を広げていくという、そういう地道な運動というのはやはり識字の今まで大事にしてきたことにもある。そういったことが拾われる社会が大切だと思っている。この教室ではそういうことをしゃべっていいんだ、語っていいんだというふうに思えるようなおしゃべりを大事にしながら、いろんなところで報告に行く、みんなからの声を聞いて、またそれが励みになるというのを繰り返す。その積み重ねが綴れるということと思っている。

Ⅲ 総括討論

協力者 昨日2本、今日2本の合計4本の報告者の皆さんに前に並んでいただきました。昨日、今日、聞きたいところがあったけど聞けなかった、もう少しこの辺を膨らまして聞きたいとか、質問がありましたら、お願いします。

熊本 今日報告の識字学級について、少し最近の状況と私が新たに感じたことを発言します。それは、今年20歳になる識字学級の生徒さんで、その方は高等支援学校を卒業して仕事をされています。高等支援学校に行っている時に、学校に行くことがつらいような状況があって、識字学級の講師の方とのつながりの中、識字学級に来るようになり、識字学級に来て、年齢が離れたおじいちゃん、おばあちゃんとの出会いの中で元気をもらい、学校での苦しみを乗り越えて卒業し就職しました。この前は車の免許を取得して車を買って、生きている姿を見て、識字学級がその人に与える場、居場所であっ

たとあらためて感じた。今回の識字学級の報告から識字学級の思いやつながりあう長年の取り組みが大きな意味のあるものとあらためて感じた。

報告者 B(大阪) 先ほど識字について社会にどのように発信していますかというご質問があった。熊本県の識字学級でフィリピン出身の方が自動車免許を取得されたという内容について会場から紹介していただければと思う、どうでしょうか。

熊本 うちの識字学級も40年をちょっと超え、最初の頃は1人でしたが、だんだん参加者が多くなり、一時期20人以上の方が参加されました。けれども、明治・大正生まれの方がたが病気で亡くなったりし、人数が極端に減ったときがあった。その頃、外国から町に結婚して来られた方がたが10人ほどおられ、その一人がフィリピンの方で、日本が大好きで、働くこともとてもお好きで、日本での免許を取得したいということで、一生懸命勉強され、英語での運転免許を取得された。その方はすごく識字学級で勉強され、自立し子どもさんも成長されて、日本に来てよかった、と思われている。これはやはり識字学級の成果であったと自負している。少しでも人様のお役に立てればと思う。

福岡 若者という言葉や若者がどうつながっているのかという言葉が出ていたので、若者の自分が話せたらなと思う。私は永岡の識字学級に行かせてもらっていて、心が揺さぶられることがとても多く、まず一つは、自分はまだ働いて2年目で、それも福岡以外の県から来ているので、わからないことが多く、そんな中で永岡識字学級に行ってみるといいと聞いたので行ってみたら、自分ごとのようにいろいろな方に心配していただき、一人暮らしで働いてすごいね、と言ってくれ、それがとても温かく、そこでまた心が揺さぶられて、今日、永岡識字学級の「さんばばさん」たちが自分の気持ち、今までどんなことを語ったのかというのを涙ながらに話されるのを見て、私も自分ごとのように差別に怒りを覚え、なんでこんな温かい人たちが辛い思いをしなければならないのかと思う。自分はこうやってつなげてもらった立場であり、教員なので、子どもたちにしっかりとつなげ、自分と同じように怒りとか温かさとかをそのまま純粹に感じてもらえる授業をしていきたいと思う。

福岡 つなぐ、広げるというところが一つのキーワードになるのかなと思う。私の支部では、中学生の解放学習の中で先輩から学び語り継ぐということで年に2・3回、先輩たちから話を聞く機会をつくっている。子ども会や親子で識字の話をするのは少ないが、運動の先輩から後輩に語り継ぐ中で識字のことを大切にしている。

福岡(報告関係者) 学校の教員です。やはり識字

学級に学ばせてもらったことを、学んだということで終わらせるのではなく、部落問題をどう学校現場で教えるか、部落の存在をどう教えるのか、本気で教師が向き合うことが大切であると思っている。学校教育で部落とどう子どもたちを会わせるか、プラスの出会いをさせたい。識字で学んだことを教材化し学校現場で活かし、子どもたちが差別を許さない人間に育つよう、地域、学校、行政が協力しあい取り組みを進めている。

鳥取 高校の教員です。いつも私は第1分科会か第3分科会に参加してきた。今回、学校現場以外で頑張っておられる方の生の声をきちんと聞いて学びたく、初めて第4分科会に参加した。識字について自分は勉強や経験がたらないので、今日は特に永岡識字学級の3人の生徒さんから大事な貴重な話をいただいた。私は、学生時代に学んだ「無知こそ差別の始まり」という言葉を大切に教育活動をしてきたつもりです。でも今日のようにたくさんの人が、差別を許さない活動とか、差別をなくす活動とか頑張ってきているのに部落差別がなくなっていないのはなぜなのかということや社会に問い続ける姿勢とか、社会を構成している一人として、自分に問う姿勢、なぜなくなると思うのか、社会に問う、自分に問うという問いかけを学校のロングホームルームの中でしっかり入れていきたいと思った。明日からまた頑張りたい。

協力者 まだまだたくさん意見がある方もおられると思いますが、時間が迫っておりますので、昨日、今日の報告者の方から一言ずついただいて、第76回大会第4分科会第3分散会をしめていきたいと思っております。

—報告者から2日間の学びと感想—

報告者(⑫大阪) 昨日報告をし、自分自身のアイデンティティを育んでくれたものって何だったんだろう、ということやいろいろ考えていました。例えば、両親であったり、それからやはり、今日識字がテーマでしたけれど、私は結構、識字学級のおばちゃんに育てられたというか、教えてもらったことが多いなと思っています。そのエピソードは、今日はしゃべる時間がないので省きますが。あと私は自分の住むまちに込められた思いを知り、それが今の私をかたちづくってくれているというふうに思っています。会場におられる皆さんもそうだと思いますが、差別をなくそうとか、人権を大切にしていこうという人たちとの出会いが、私を育ててくれたなと思っています。私の中での誇りがあるとすればそういうことだと思っています。それをもう一度確かめることが今回できましたし自分の中でも、いろんな課題を与えてもらえたと思っています。それもふまえて、これからも私は差別をなくしていくために正しいと考える情報を発信していき、自分はカミン

グアウトをし続けていきたいと思っております。

報告者(京都) 私は部落差別撤廃の活動に直接関わってなく、在日コリアンの問題にずっと向き合ってきました。やはりマイノリティのおかれている立場とか状況とか思いというのが、非常に共通点があるし同じだなと感じながら、皆さんの報告や質疑を聞かせていただいていた。私すごくメンタルが弱くて、すぐダウンしてうつうつとしたりするんですけど、私に何ができるかということ、たくさんの人に伝えていって、私自身の言葉で語ってきたいということが一番に思っています。それは、私ができるのは闘いというよりもつながって、知って、出会って、少しずつみんなの心の中に温かい気持ちがあつたらいいなということです。過去にいろんな失敗をしたり、失言をしたりすることがあっても、それは気持ちがあればやり直すことができるし、教育ってすごく大事だと常々思っています。そして、私がすごく大切にしているキーワードは許すということです。嫌なことがあったときに、相手がどういう状況や背景があるのかということに思いを馳せることで、行為は許さなくてもその人を許すことができる。そういうふうにして許し合えることが大事だと思っています。でもやっぱり SOS や叫びを出すことができる場所ってというのは学校だけでもないし親だけでもない、いくつも地域の中にあることが大事であると思えました。

報告者(福岡 識字学級生 A) 私は自分が本当に学校行けなかったということで学ぶことができず、すごく自分が苦勞したので、今からの先生やいろんな人たちに教育というものや学校での学びについて、一人ひとりの子どもたちを大切にみてほしいなと思います。

報告者(福岡 識字学級生 B) 報告の湯の上宣言にありますように1本の鉛筆が重たい。鉛筆を握ったらガタガタ手が震えて、なかなか字が書けないんです。学校のこともまったく覚えておりません。でも永岡に来てから識字学級に行くことになって、漢字の検定もうけました。いろんな人の前でお話することもできました。これもやっぱり識字学級のおかげと思っています。

報告者(福岡 識字学級生 C) 一言で言うと感謝です。ここに来て3人で報告できたこと。それを応援していただいた皆さんに感謝をしたいと思っております。皆さんの報告や質疑を聞かせていただいて、識字学級をずっと続けてきたことにあらためて頑張ったなと思います。もう一つ課題が明確になったと思っています。それは、永岡支部の今後の進み方、例えばまちづくりです。厳しい生活の実態もありますが、子どもたちの教育のことやいろいろな課題がいっぱいあるけれど、この会場で皆さんと出会ってまた明確になり、今後もそれをきちんと方針化し

ながら進んでいかないといけないとあらためて思ったことでした。

報告者(福岡) 昨日の報告、今日のこの会場を見て、こんなにも応援してくれる人、仲間がいるんだという気持ちになりました。報告を終え、3人のおばあちゃんが言われたように、自分は識字学級の思いを次の世代にしっかりつなぐことを胸にこれからも頑張っていきたいと痛切に感じました。

報告者(①大阪 A) つながるということはキーワードで、いろいろもっと言えたらよかったなと思うことがあります。つながるといのは本当に大事なことで、今日会場で発言された方とも識字学級がきっかけで交流を重ねています。教室だけでつながっていただけではなく、同じ識字というところでつながっていく、励まし合うというのがすごく力になると思います。識字学級の全国調査ということで、いろんな教室に行かせていただいています。全国のいろんなところで、同じように大事にしているというのを感じ、つながれる。それがすごく私たち自身の力になるし、頑張ろうと思っています。もう一つつながれるというので言うと、三重県のある小学校、中学校での取り組みを紹介します。そこでは、小学5年生から中学3年生まで、地元の運動団体の方、隣保館の方、行政の方、PTAの方が集まってフォーラムに取り組んでおられます。日頃から幼小中、地域ということで、同和教育を熱心に取り組まれているところで、学習を誰が進めるのかといえば、中学3年生なんです。反差別の教育というプログラムを子どもたちの主導でやり、それが自分たちの課題になっているか考えるという学習です。そして、識字学級を学校教員・学校教育に訴えるというような作品も学校には展示され、識字学級の取り組みを学校につないでいます。今回もいろんな方とお話しができ、すごく嬉しく思っています。また全国のあちこちにおじゃましますのでよろしくお願ひします。

報告者(①大阪 B) 今の三重県の中学校に展示されている識字学級の作品の最後には「私から文字を奪ったのは学校の先生です」と書かれています。そういう作品を毎日見ながら教員が勤めているという学校です。今回もそうですが集会が終わったときの一番の財産は、ネットワークであり、今話になっているつながりだと思います。1回の集会でできるつながりは薄っぺらい細いものだと思うんですが、薄っぺらい細いつながり・ネットワークをどれだけ太いものにしていけるかというのは、ひとえに私たち自身にかかっていると思います。ぜひこれからもあの時の話とかいう感じで私たちに声をかけてもらえると嬉しいなと思います。私もいろいろしたいなと思っています。今後ともよろしくお願ひします。

協力者 予定の時間から10分ほど過ぎました。2日間の学びをまた地元へ届けて、子どもたちあるいは地域で活かしていきたいと思います。2日間ごくろうさまでした。